



甘く優しい世界で 生きるには

7.5

著 深木

Contents

目次

- 002 第6話
- 015 閑話1 グレイ・フォン・マジェスタ
- 039 第7話
- 059 閑話2 サナーレ・テラベア
- 070 第8話

☆プロローグならびに第1話から第5話はドラマCDに収録されております。





第6話

——今から二か月前。

『ただいまより、エピス学園高等部の卒業行事に関する会議を始める』

グレイ様のそんな宣言と共に、俺達の怒涛どとうの日々は始まった。

卒業式、昼食会、見送りの儀という三部構成で行われるエピス学園の卒業行事の責任者に選ばれたグレイ様は、ご自身は総監督と卒業式を受け持ち、昼食会の準備には第三王女として茶会などに出席する機会が多いクレアを任命。

そして、見送りの演出を俺へと任せた。

式辞や昼食会という最後の交流を終えた先輩方は年に二度、入学式と卒業式の時だけ開かれる正門を通って、それぞれ旅立っていく。先輩方が歩く門を挟んだ前後百メートルの間を、魔法や小道具を使って華やかに彩る役目を託されたというわけだ。

通常ならば多くの人手と、練習時間が必要な見送りの演出だが、俺ならば精霊達の力を借りて一人で行うことができるからな。

無論、その期待を裏切らないよう、精霊達やフェニチエ達、それからヘンドラ商会の力を総動員させてもらっている。

そんな風に各自、可能ならば同級生や後輩へ声をかけて手伝ってもらい、必要な備品の購入から会場の設営までを手掛け、卒業行事の準備が整ったことを確認したのは一昨日のことである。

「少し早かったようですね」

「そうだな」

辺りを見回しそう告げたバラドに頷き、俺は正門横の柱へ寄りかかる。

見送りの準備のため、三日前から関係者以外立ち入り禁止となっている正門前に俺とバラド以外の人影はなく、とても静かだった。

それにしても昨日は、あの二か月間が霞むほど濃かったな……。

寝不足と相まって、春の訪れを感じさせる暖かな陽気に眠気を誘われた俺は、気を紛らわすために、そんなことを考える。

卒業式を二日後に控えた昨日は、朝から大忙しだった。

バラドと共に見送りの儀で使うシャボン玉と贈り物を確認したあと、俺はグレイ様やクレアと合流し鍛錬場に向かった。

そこで行われた、先輩方との試合。

卒業記念ということで、武器やスキル、魔法すべて使用可という条件や、逆に肉体のみでといっ

た先輩方の要望を受けて行われる戦いの一つ一つは短く、体力を大幅に消耗したりはしなかった。しかし、ごく稀に戦いの裏へ込められている恋愛祈願が、俺の精神をガリガリ削っていった。卒業後は会わない可能性が高い先輩方も多いので、できる限り文句は言いたくないのだが、正直俺との試合結果で験担ぎするのはご遠慮願いたい。気を使い過ぎて、胃に穴が開きそうだ。

負けたこととくじけてしまった先輩をなだめすかし、告白しに向かわせた昨日の最終試合を思い出しながら、ため息を一つ零す。

今日は、普通の腕試しだけだといいな……。

まあ、無理だろうな、と遠い目をしつつ、俺は水色の空を見上げる。

爽やかな初春の日差しは、徹夜明けの目に染みだ。

——そろそろ、レオ先輩が案内書を配り始めている頃かな。

じんわり痛む目を庇うように視線を地面へ落とす最中、昨日の極めつけに起った卒業行事の案内書消失事件を思い出した俺は、そんなことを考える。

各学科の首席が卒業生達に配るのが、創立当初からの慣例である卒業行事の案内書。各学科のトップを認知させるという大事な役割を持つそれを、預かったその日に首席と次席が消失させるなど、誰が想像しただろうか。

神妙な面持ちで頭を下げたレオ先輩達に連れられて、足を運んだ薬学科の研究室で見たあの光景は、しばらくの間、忘れられないだろう。

割れて粉々になった瓶と、周辺へ飛び散る魔法薬と思われる液体。

それから、水びだしになった一角と、そこへ浮かぶ消し炭。

事前に説明されていたにもかかわらず、一体何があつたと問いたくなる光景だつた。

無残なその状況に現実逃避したい気分一杯だつたが、急を要する事態ということで、俺達はすぐさま対策を話し合った。

そうして、材料を確保し、原本となる案内書を秘密裏に手に入れるためグレイ様とクレアを会議室から連れ出す、といった困難を乗り越え、薬学科用の案内書を刷り直すこと一晚。

やり遂げた達成感と危機的状況から脱した解放感からか、今日の朝日は大変美しかった。

レオ先輩達に仮眠を取らせることを優先させたため、少しぼんやりする。しかし、これで首席をとつたレオ先輩や、同率で次席となつたりエチ先輩とサナ先輩の経歴に、傷をつけずに済んだのだから安いものだろう。

昨日一日を振り返りながらそんなことを考えていると、空を見張っていたバラドが声を上げた。

「——ドイル様」

「来たか？」

「はい」

バラドの返事を聞いた俺は顔を上げる。

綺麗な水色の空へ視線を向ければ、目当ての青色はすぐに見つかった。

空よりも青い翼を広げて滑るように空を飛ぶ姿は美しく、伸びてきた鶏冠と孔雀くじやうに似た尾羽が風を受けて揺れる様は優美で神獣と称するにふさわしい。しかし、見る見るうちに近づいてくる青色

の鳥達は、幻想的な外見とは裏腹に元気な声を上げながら俺の元へとやってくる。

『おはようございます、ドイル様』

『お待たせしてしまいません、ドイル様』

『主様。来た』

『おはよう、ご主人様！ ご機嫌いかが？』

『ご主人様、お腹空いた』

アインス、ツヴァイ、ドライ、フィーア、フუნフの順に、各々の性格がよくわかる言葉を言いながら地面に降り立ったフェニーチェ達に合わせ、膝をつく。

見惚れるほど美しく成長してきたが、中身はあまり変わらないな……。

そう心の中で苦笑しながら、体軀ばかり目覚ましい変化を遂げた彼らを見やる。去年の夏頃は鳩ほどの大きさだった彼らも、半年近い時間が経ったことで大きめの鶏サイズへと成長した。そのため、五羽同時に体へ乗せるのはスペース的に辛い。

皆もそれは承知しているらしく、全員が集まる時は大人しく地面か近場の木々などに降り立つようになつた。

「おはよう、アインス。たいして待つてないから、ツヴァイはそう気にするな。それから、よく来たな、ドライ。フィーアも元気そうだなによりだ。——ああ、あとフუნフ。ご褒美は、練習が終わるまでお預けだ」

一羽一羽撫でながら、言葉を返していく。その際、漏れ出る魔力を食べようとしているフუნフ

を発見したので釘を刺し、距離をあげる。

すると、その様子を見ていたアインズとツヴァイが、呆れたように呟いた。

『さつき一緒に朝ご飯食べたじゃない』

『そうだよ。いつもどおり僕らより食べてたし』

『飛んだらお腹空いた』

フუნフは二人にそう反論するが、すかさずドライとフィーアが嘴を開く。

『早すぎ』

『あんたちよつと食べ過ぎよ。見るからに私達より丸いし』

フィーアはそう告げると、広げた羽で皆よりちよつとふつくらしている末っ子の背を押す。途端、

フუნフは『むう!?!』と言って前のめりに転がった。

『『『『………』』』』』

鳥とは思えぬフუნフの動きに、沈黙する兄弟達。

今のはフォローのしようがないぞ、フუნフ……。

飛んでいる時は機敏に動けるものの、基本動作がどんくさいフუნフに、俺は心の中でそつと涙を拭う。

『………ちよつと減量しようか、フუნフ』

たつぷり間をあけてから呟かれたツヴァイのその言葉が、とても悲しかった。

気まずい沈黙が落ちる中、俺はフェニーチェ達の流れる微妙な空気を払拭するべく、少し大きめの声で告げる。

「——バード。あれを出してくれ」

「^{かしこ}畏まりました」

そう応えるや否や、バードは亜空間からシートに包まれた塊を五つ取り出し並べる。

俺の腰の高さほどあるその荷物は、実際に運んでもらう先輩方への贈り物が入った包みと同じ形にしてあり、重さも同等にしてある。いうなれば、練習用の荷だ。

「今日は荷物と皆の待機位置の確認。それらが終わったら場所を変えて、俺の合図に合わせて飛び立って、包みを解く練習をする」

「『はい！』」

俺の言葉にフェニーチェ達は元気よく答え、荷の上へとそれぞれ移動していく。

迷うことなく行動する姿に練習の成果を実感して頬が緩むが、フェニーチェ達が用意を終えて俺を見る前に己の表情を引き締める。

「^{しっぴ}躑や訓練はメリハリが大事だからな。」

「本番は明日。これが最後の練習になるから、頼んだぞ」

「『はい！』」

準備を終えた頃を見計らいフェニーチェ達へ声をかければ、威勢のいい声が飛び交う。

その様子に気づかれないよう小さく口端を上げた俺は、高らかに命じる。

「では、移動開始！」

俺の命に従い、白い荷を足で掴んだ青い鳥達が一斉に羽ばたいた。

* * *

——数時間後。

場所はところ変わって、セルリー様の研究室近くにある隠し部屋。

その中で、俺は精霊達と共にいた。

床に座り込む俺と対峙しているのは、黒猫の土人形に入った土の精霊ティエーラ。彼女の前には、四角や丸型をした掌サイズのタイル状の石や、俺の体がすっぽり隠れそうな石板が並べられている。

「白い石畳はこれを敷き詰めるかたちでいいかしら？」

そう言いながら、レンガのような長方形をした白い石を押し出したティエーラへ頷く。

「道の強度や見た目からいって、それが一番だ。明日はその石で道を隙間なく覆ってくれ」

「任せて」

胸を張ってそう答えたティエーラへ「頼む」と声をかけたあと、俺は上へと視線を向ける。

高く作られた隠し部屋の天井と床の丁度中間くらいに佇む、ラファールとアルヴィオーネ。彼女達の手にはシャボン液の入った器と吹くための筒があり、周りには沢山のシャボン玉が浮かんでいた。

風魔法で泡が下に落ちないようにしているのか、ラファール達を取り巻くようにシャボン玉はゆつくりと回遊し、時折二人の体にぶつかって割れる。そんな感触も彼女達には楽しいらしく、泡の中に手を伸ばしたりして遊びながら、次々とシャボン玉を作り出していった。

「ラファール、アルヴィオーネ」

名を呼べば、彼女達はシャボン玉で遊ぶのをやめ、俺の元へと降りてくる。

「なあに？ 愛しい子」

「話は終わったの？」

柔らかに微笑むラファールと、遊び足りないと言いたげな表情を浮かべるアルヴィオーネと一緒に、空中に留め置かれていたシャボン玉がふわりふわりと落ちてくる。

「シャボン玉は気に入ったか？」

「ええ！ 見た目も綺麗だし、とっても楽しいわ」

俺の問いにラファールが嬉しそうにそう答えると、アルヴィオーネはちよつと不満げな表情を浮かべつつも頷く。

「欲を言えば、こんな室内じゃなくて外で思う存分遊びたいけどね」

「シャボン玉は陽光の下の方が綺麗だからな」

シャボンを指で突きながら呟いたアルヴィオーネに苦笑しつつ同意すれば、彼女はとんでもない事実を口にした。

「まあ、いいわ。ラファール達のお蔭で、しばらくの間は晴れ続きのはずだから、明日が終れば沢

山遊べるし」

「皆快く手伝ってくれたから、あと三日は快晴よ」

胸を張ってそう答えたラファールに、頭がくらつとする。

天候が変わりやすい春先にもかかわらず、晴れ間が続きそうで安心していたが、運がよかつたなんて次元の話ではなかつたらしい。彼女の口ぶりから察するに、ラファールが仲間の風の精霊達に協力を仰ぎ、強制的に雲を排除していたようだ。

——そんなこととして、周辺各国の天候は大丈夫なのか？

シャボン玉で遊びたいなんて理由で、天候が変わるなんて笑えぬ冗談だ。

今は台風や暴風雨の時期ではないが、小雨や曇り空が多くみられる季節。しかも、三日間は確実に晴れるというのならば、結構な範囲の雲を移動させたはず。

雲を飛ばした方向によつては大変なことになるのでは、と不安になった俺は恐る恐る口を開く。

「風の精霊達に雲を運ばせたのか？」

「ええ。この辺りを巡っている子達に『一緒に雲も持つていってくれない？』って頼んだら二つ返事です承してくれたの」

朗らかに答えるラファールに、俺は聞きたくないが、確かめなければならぬことを尋ねる。

「周辺に雨雲とか大きめの雲はあったか？ あと、具体的にはどの方向に？」

「雨雲や大きな雲はなかつたわ。方角は深淵の森の方よ。アルヴィオーネが、人の子が住まう地に雲を沢山流すのはよくないと言うから」

ラファールのその言葉に、俺は胸を撫で下ろす。

深淵の森は広大だし、もともと大きな雲や雨雲がなかったというのなら、たいした被害は起きないだろう。というか、そうだと信じたい。

そんな俺の内心を見透かしたのか、アルヴィオーネがクスツと笑い声を漏らす。

「そんなに心配しなくても大丈夫よ、ご主人様。もともと天気がよかったみたいで、この辺りに雲は少なかつたから、天候に変化はないわ。太陽が隠れないようになった、かなりの効果よ」

「……そうか」

「神々でもあるまいし、さすがの私達も天候や気候を変えるほどの力はないわよ？ 干渉できるものも限られているし、長い間、力を続けたら消えちゃうわ。今回だって、ラファールが五日前からいから周辺の風の精霊に声をかけて運んでもらったんだから」

慌てふためく俺がよほどおかしかったのか、アルヴィオーネはそう言って笑う。

その姿に苛立ちを感じないわけではないが、俺は黙って不満を呑み込んだ。

アルヴィオーネやラファールならば、津波や竜巻を発生させることは可能だ。そしてそれが、国や人に大きな被害を与えることは間違いない。

しかし、言われてみれば確かに、天候や気候レベルで環境に変化を与えるならば、月や年単位での干渉が必要だ。そして気象には風向きや温度、湿度といった様々な事象が影響し合っている。普通に考えて、精霊が天候を操るなど不可能だ。

「でも、ご主人様がそんな勘違いするなんて珍しいわね……」

ひとしきり笑い終えたアルヴィオーネは首を傾げると、しばし考え込む。次いで、心配そうな表情を浮かべると、俺の顔を覗き込みながら告げた。

「少し休んだ方がいいんじゃない？ 結局、他の子達に仮眠を取らせて寝てないんでしょう？」

「無理しちゃ駄目よ、愛しい子」

「そうそう。人には睡眠が必要よ。練習は十分したし、ちゃんと起こしてあげるから寝なさい」

ラファールの言葉にアルヴィオーネが頷いたかと思えば、時間じくして、俺の真横に石造りのベッドが現れた。

石造りという時点で、やったのはテイエーラしかいない。

「休むなら使つて？ 硬いけど床に寝るよりはいいわ」

「気が利くわね」

首を傾げながら告げる黒猫と褒めるアルヴィオーネ、そして心配そうな眼差しを俺へと向けるラファール。

「寝ましよう？」

「……ああ」

ラファールに手を取られ、ゆつくり立ち上がらされた俺は、苦笑しつつ従う。そして促されるまま、大理石と思われる石で作られたベッドの上へ乗る。

「一時間経ったら起こしてくれ」

ベッドを取り囲む精霊達にそう告げて横たわれば、どこからか安堵の息を吐く音が聞こえた。

「わかったわ。ゆつくり休んでね、愛しい子」
そうして俺は、ラファールの優しい声を聞きながら、ゆつくりと目を閉じたのだった。